

明代における因明学の研究

常

偉

目 次

1. はじめに
 2. 「龍樹」に関する問題
 3. 能立・所立
 4. 現量説
 5. むすび
- 参考文献

1. はじめに

明代における唯識教学は、普泰（?-1511年頃-?）の法孫である洪恩（1545-1608）を軸にして、大きく二段階に分けることができる。洪恩以前の人師達による研鑽は普泰の『八識規矩』、世親の『大乘百法明門論』に対する注釈のみで、その両書以外の唯識典籍に対する研鑽はなされていない。こうした唯識教学研鑽の動向に大きな一石を投じたのが洪恩である。『相宗八要』（以下『八要』）という書目は洪恩が編纂した書であり、世親（400-480年頃）の『唯識三十頌』や商羯羅主（6世紀の人）の『因明入正理論』（以下『入論』）・『唯識比量』等の八書を集め、それらを唯識教学の研鑽に必要な書目として提唱し、明の唯識教学の発展に大きな寄与を及ぼした。洪恩以後の人師達は『八要』に収録される書目を研鑽し、多くの書籍を残した。興味深いことには八の書目の中で、『入論』および『唯識比量』の二つは因明に係るものであり、換言すれば、因明書目が四分の一を占めているということができる。したがって、明の唯識教学の特色の一つは、因明典籍をも唯識教学の研鑽に欠かせない典籍として取り扱っていったという点にあるであろう。さらにいえば、現存する明の唯識諸師の因明撰述は計8種も残されている。こられの点を勘案すれば、明代唯識教学の全貌を把握するには、因明文献を無視することはできないのである。^①

中国において因明研究が始まったのはインドに留学した玄奘三蔵（602-664、以下玄奘）が陳

那（480-540年頃）の『因明正理門論』（以下『門論』）と『門論』の入門書である『入論』が漢訳されて以降と考えられている。神泰（?-645-?）・明覚（?-655-?）等の玄奘門下の人々がその二論の注釈書を著したことは、『三蔵法師伝』に伝えられるところである^③。しかし、元末以降は慈恩大師基（632-682、以下基）の『因明大疏』の逸文を幾つか残すばかりで、唐の時代の因明に関する著述は全く散逸してしまった^④。その点について、王肯堂（1549-1613）の『因明入正理論集解』（以下『因明集解』）には次のように指摘されている。すなわち、

此論自奘師以来、称最奥難曉。況古疏鈔亡失、講下又無傳派（略）壬子夏、蘊璞法師結制余拙隱園中、出此論解。見示、余伏枕無所用心、因得從容讀之、開卷瞭然。具有定見、非余揣摩依傍者比也。至以龍樹論与清涼永明所引因明疏鈔語、参互考訂、則所牴牾亦復有之。^⑤
於是晝而考夜而思、研究不輟、寢食俱忘。如坐暗室、久而漸明、今則了了盡見室中諸物。

と。これによると、『因明集解』を撰述するとき、「古疏鈔」と呼ばれる『入論』の注釈書がすでに亡失しており、『入論』に対する研鑽の伝承も絶えていたという。そのため、龍樹の『論』と見なされていた書籍（後述）と、清涼（澄観738-839、以下澄観）・永明（延寿905-976、以下永明）等が引用する「因明疏鈔」の語を参考にしながら『入論』を研鑽していたということが窺える。関係する文献を検証してみると、次の四点が知られる。一点目は、永明の『宗鏡録』である。その巻51において、『因明大疏』冒頭に出る「叙所因」をほぼ全て引用しており、「唯識比量」に関する本文も見られる。二点目は、澄観の『大方広仏華嚴経疏』（以下『華嚴疏』）、およびそれを注釈する『華嚴経随疏演義鈔』（以下『演義鈔』）である。この両書においても、因明の言及が見出すことができる。三点目は、雲峰（生没不詳）の『唯識開蒙問答』（以下『問答』）である。本書にも『因明大疏』の本文が確認できる。その四書は明代においても存在していたので、明の諸師はそれらを参考にすることができたと考えられる。^⑥

現在では、明代の因明文献に対する先行研究として、陳帥・簡凱廷氏編『明清『因明入正理論』珍稀注釈選輯』や、陳帥氏「明清因明史上被忽視の一環—明釈真貴『因明入正理論集解』評析—」・「基於新見文献的明清因明史重建」・「基於「差別性故」相關證積的漢轉因明學術史考察」・「基於新見文献的明清因三相考察—兼論明清因明的學術價值—」・「明清因明喻支證積中的誤讀与重塑」等も挙げられるが、歴史学・書誌学的な視座からの研究が主であると言っても過言ではないであろう。『明清『因明入正理論』珍稀注釈選輯』では、叡山文庫蔵書の調査によって、江戸時代の人師の著した『因明入正理論直解講記』が確認された（撰者不明）。それは智旭（1599-1655）の『因明入正理論直解』（以下『因明直解』）の複注であり、智旭・真界（生没不詳、真貴と王肯堂の間の人物としか知られていない）・明昱（?-1602-1612-?）の『入論』注

釈書が基の『因明大疏』を用いて批判されていた^⑨。

そこで本研究では、『八要』に収録される因明典籍に対する唯識諸師の注釈書による学説の検証という視座より、明代における因明学の教学的特色を解明していきたい。その上で、明代における唯識教学の全貌を掴み、中国唯識教学史においてどのような地位を占めていたかという課題に貢献したいと考えている。すでに指摘したように、教学に触れる先行研究は「基於新見文献の明清因三相考察」・「基於「差別性故」相關詮釋的漢轉因明學術史考察」・「明清因明喻支詮釋中的誤讀与重塑」の三つしかない。その三つの先行研究によって指摘される「従来と異なる学説」は次の三点である。一点目は「宗依・宗体」の区分であり、二点目は「喻依・喻体」の理解であり、三点目は「因三相」の解釈である。これに対して筆者は、現存する明の因明文献を検討し、次の知見を新たに指摘しておきたい。それは、下記の三点が明の代の唯識諸師によってなされていたということである。すなわち、

- (一)『洪武南蔵』等に記される「大域龍樹」を「大域・龍樹」と読み取る中で「大域」の二文字を省略し、明の諸師は『門論』を「龍樹」著作であるとして取り扱っていたということ。
- (二)『演義鈔』の影響を受けた上で「三十三過」を用い、明昱は「過失に陥らない宗・因・喻を能立とする」という「能立」説を案出していたということ。
- (三)『入論』の本文を自分なりに読み取り、「名種等所有分別」を「名種分別」と句読した上で、「名言種子」の言語を用いて「現量には名言種子の分別なし」という現量の見解を明昱が述べていたということ。

以上三点である。それ以外にも、真貴(1558-?)撰『因明入正理論集解』(王肯堂の『因明入正理論集解』を区別するため、『真貴解』と略す)を本文二箇所のみで取り上げて、「宗体は後陳である」と真貴が主張していたという先行研究の指摘も再検討する余地があると考えている。以下、上記の点にもとづき、明代における因明学の特徴を解明することにしたい。

2. 「龍樹」に関する問題

『門論』は、陳那(ディグナーガ)の因明主著の一つである。漢訳として玄奘・義浄の二本があり、それぞれ『因明正理門論』・『因明正理門論本』と称される^⑪。『門論』撰者の名前は、古くから「陳那・域龍・童授」の三つの漢訳があり、いずれも同一人物を指している。しかし、明の唯識諸師の因明著作においては、『門論』を「龍樹」の撰述としている。その「龍樹」について先行研究では、明末清初の人師達においては八宗の祖と仰ぐ「龍樹」のことであると受け止められていたとの指摘がなされているが、関係する文献には明記されていない。したがっ

て、八宗の祖としての「龍樹」であるか否かの問題については、明確な結論を出すことは難しいと考えられてきたのである。

しかし、ここでは関連する問題点を三つ提示したい。一点目は、文献上において『門論』の撰者が龍樹であるとする見解がいつ頃から見られたかということ。二点目は、明の諸師のいう龍樹と陳那は同一人物であるかということ。三点目は、なぜ『門論』の撰者が龍樹であるとなっていたのかということ。以上の三点である。これについて関係する文献を検討した結果、真貴を初めとする王肯堂等の明の人師達は龍樹の撰述と見なしており、陳那と同一人物ではないと取り扱っていたことが明らかとなった。すなわち、「大域龍樹」の四文字を「大域・龍樹」と読み取った上で、「大域」の二文字を省略し、「龍樹」としたのである。

そこで、現存する明の諸師による関係文献の記述を詳細に調査してみると、『門論』を龍樹撰述とする文献の記述を多く見出すことができた。以下に、その実態の一部を示すと、およそ次のようになる。

人物	撰述	箇所
真貴	『因明入正理論集解』	1 「若比量生智、則入道理、以領立者円満義故。故龍樹頌云、余所説因生。謂此智既從所説能立因生、入道理矣（丁5左）。2 「有陳那為妙吉祥警論、重造因明。問、立破等義已備衆經、況復多論、何因緣故作斯論耶。答、為愆曲被時機、樂略文者、能易入故。菩薩若依龍樹論本首云、為愆簡持能立能破義中真実、故作斯論（丁6右）。3 「此中宗等多言説名能立、由宗因喻多言、開示諸有問者、未了義故。此中者、龍樹云、起論端義。謂辭不孤起、籍此為緒故（丁8右）」
真界	『因明入正理論解』	1 「故永明云、劫初足目創標真似、爰及世親、再陳軌式。雖紀綱已列而幽致未分。有陳那為妙吉祥菩薩警論、乃重造因明（略）故龍樹因明論云、為欲簡持能立能破義中真実、故造斯論（Z53、909b）。2 「又解、釈成宗義。謂此真能立宗（略）謂將前陳後陳和合一処、隨其立者自意樂許所成立性、則名為宗。故龍樹云、是中唯隨自意樂為所成立、説名宗（Z53、910a1）。3 「故龍樹論云、宗無因不有。少有不濟、則非定有矣。如無常以所作為因方（Z53、910b）」。
王肯堂	『因明集解』	1 「壬子夏、蘊璞法師結制余拙隱園中、出此論解。見示、余伏枕無所用心、因得從容讀之、開卷瞭然、具有定見、非余揣摩依傍者比也。至以龍樹論與清涼永明所引因明疏鈔語、參互考訂、則所抵牾亦復有之。於是晝而考夜而思、研究不輟、寢食俱忘、如坐暗室、久而漸明（Z53、917c-918a）」2 「時彼南印度按達羅国王、見放光明、疑入金剛喻定、請証無學果（略）欲遂王請。妙吉祥菩薩因彈指警曰、何捨大心（略）陳那敬受指誨、奉以周旋、於是覃思研精、作因明正理門論。正理者、諸法本真之体義。門者、權衡照解之所由。據此、則似此論為能入、陳那論為所入也。藏中有因明正理門論兩訳、乃大域龍樹菩薩造、而陳那之論莫可攷見矣（Z53、919a）」3 「其勤勇無

		問所發性、於無常宗亦非正因。故龍樹云、如前成立声は無常、勤勇無問所發性故、現見勤勇無問所發 (Z53、921a)。」
明昱	『因明入正理直疏』	1 「応知多言、皆理為過。則三十三過名似能立、反過為理、亦三十三理名真能立。故龍樹云、即此多言說名能立、及似能立。隨其所應、為開悟他、說此能立、及似能立 (Z53、933c)」 2 「言徧是宗法性者、是顯俱品義。以同品之因、唯徧同品之宗、異品之因、唯徧異品之宗、名徧是宗法。故龍樹以徧是宗法為俱品 (Z53、934a)」 3 「比量相違者、如說瓶等是常 (略) 名為比量今立者以瓶等為有法、定常為宗。然常非所作、瓶等不成。瓶等所作、常義非有。龍樹云、所作非常故。常非所作故。較之比量相違、明如指掌 (Z53、935a)」。
	『三支比量義鈔』	1 「足目者、始標真似兩門之論師也。龍樹云、如是過類、足目所說、多分說為似能破性。世親軌式、亦不出真似兩門。義散諸論、未集成編。陳那下、述菩薩造論之由 (Z53、960a)」。
永海	『因明入正理論會義』	1 「今論八門二益、即所依一種也。而体性等六種已在其中欵。龍樹論云、因通生了、生因如種生芽、証因如灯照物。然此生了、各有三種、皆取第一種言生智了為因明 (陳・簡氏[2021]、179)」 2 「言此中者、指本論也。龍樹論云、起論端義。謂辭不孤起、籍此為緒故。或簡持、簡謂簡他、持謂自持。(同上186)」 3 「故同言從義非余。故龍樹云、此中若品与所立法鄰近均等、說名同品、以一切義皆名品故 (同上193)」
智旭	『因明直解』	1 「如立無常為宗、而瓶等無常、是名同喻。言異品者、謂於是異喻处、無自所立無常之宗、是名異喻 (略) 龍樹云、若所立無說名異品、非但与同品相違或異而已 (Z53、943a)」
	『閱藏知津』	1 「因明正理門論本、一卷、南爵北匪。大域龍樹菩薩造、唐大慈恩寺沙門釈玄奘訳、為欲簡持能立能破義中真実、故造斯論。因明正理門論、一卷、全上、唐大薦福寺沙門釈義浄訳 (嘉興蔵、新文豊版32冊150)」

と。このような記述が、実に60箇所以上も確認できる。具体的にいえば、『真貴解』には16箇所、真界の『因明入正理論解』(以下『因明論解』)には10箇所、王肯堂の『因明集解』には14箇所、明昱の『因明入理論直疏』(以下『因明直疏』)には6箇所、同『三支比量義鈔』には1箇所、永海(?-1628)の『因明入正理論會義』には13箇所、智旭の『因明直解』・『閱藏知津』にはそれぞれ1箇所である。それらを見ると、真貴・真界・王肯堂・明昱・永海・智旭の著した『入論』注釈書においては『門論』からの引用の冒頭に「龍樹云」や「龍樹論云」や「龍樹因明論」と表記していたことが知られる。したがって、明の人師達は『門論』を「龍樹撰述」と見なしていたことが窺えるのである。これらの文献の中で最古のものは、『真貴解』である。真貴以前には、そのような記述を見出すことができない。管見する限りでは、真貴『因明集解』は『門論』を「龍樹」の撰述とした初出文献であるといつてよいであろう。

ところで、『門論』には玄奘・義浄の二訳があるため、明の諸師の引用する『門論』は玄奘

訳か義浄訳かという問題が生じる。この問題は、諸師の用いる『門論』本文と二訳の本文との比較を通じて明確にすることができるが、二訳の本文はほぼ一致している。よって、「玄奘訳か義浄訳か」という問題に明確に結論を出すことは難しいと考えられてきたのである。しかし、『真貴解』や永海の『因明入正理論会義』には『門論』本文の前に「論本云」や「龍樹論本首云」と表記する箇所が多く見られる。この「論本」は『因明正理門論本』の略称であると推測できるので、これを勘案すると明の諸師が用いる『門論』は玄奘訳である可能性も考えられる。

最も興味深いことは、明の諸師のいう「龍樹」が従来の「陳那・大域龍」と同一人物であるか否かという点にある。これについて筆者は、『真貴解』・真界『因明論解』・王肯堂『因明集解』・永海『因明入正理論会義』等の関係文献の検証を行なった結果、同一人物ではないと考えるに至った。すなわち、各文献には次のように示されていたのである。

『真貴解』：「有陳那為妙吉祥警諭、重造因明。問、立破等義已備衆經、況復多論、何因緣故作斯論耶。答、為慾曲被時機、樂略文者能易入故。若依龍樹論本首云、為慾簡持能立能破義中真実、故作斯論」¹⁵

真界『因明論解』：「(略)一者謂宗、諸部立破等義、由宗諸義得成斯論。故慈恩云、元唯仏説散在衆經、束此成故。二者宗人、謂劫目世親定三支故、故永明云、劫初足目創標真似、爰及世親再陳軌式、雖紀綱已列而幽致未分、有陳那為妙吉祥菩薩警諭、乃重造因明、此雖宗人、義亦具矣。問、立破等義已備衆經、況復多論、何因緣故製斯論耶。答、為欲曲被時機、樂略文者能易入故、故龍樹因明論云、為欲簡持能立能破義中真実、故造斯論」¹⁶

永海『因明入正理論会義』：「嘗閱翻譯名義集、載天親菩薩才智宏遠、造大小乘論。胡不遠承仏説之因明、而反襲於足目之真似、再陳軌式也。詳思大藏之板、每朝革命重刊。此劫足二字、謄録之訛故也。謹按南北翻譯名義集中皆云題目。劫字疑是始、文義順然。良以元唯仏説、其始初題目、創標真似、則再陳之語甚為通也。是知慈恩大師云、此龍樹陳那天主等所造因明論、非己意之談、究其來源、元唯我仏所説」¹⁷

と。これを見ると、真貴・真界は共に「妙吉菩薩の警諭の為に、陳那は因明（書）を重ねて造る」と説いていたことが知られる。また、「龍樹論」と表記して『門論』本文も引いている。この二点よりすれば、真貴・真界は陳那と龍樹を別人物として取り扱っていたことが窺える。この点では永海も同様であり、「龍樹・陳那・天主等が著した因明論」と述べて、龍樹と陳那を別人物と見ていたことが知られる。また、同時代の王肯堂も次のように述べている。

慈恩大師云、因明論者元唯仏説、文広義散備在衆經。劫初足目創標真似、世親再陳軌式。

雖紀綱已列、而幽致未分、故使賓主對揚猶疑立破之則。有陳那菩薩者（略）時彼南印度按達羅國王（略）無學果者諸聖攸仰、請尊速証。菩薩撫之、欲遂王請。妙吉祥菩薩因彈指警曰、何捨大心方興小志、為弘利益者當轉慈氏所說瑜伽、匡正綱可製因明重成規矩。陳那敬受指誨、奉以周旋、於是覃思研精、乃作因明正理門論。正理者諸法本真之體義、門者權衡照解之所由。據此則似此論為能入、陳那論為所入也。藏中有因明正理門論兩訳、乃大域龍樹菩薩造、而陳那之論莫可攷見矣。¹⁸⁾

と。上記は王肯堂撰『因明集解』の冒頭にある『入論』の題解である。ここで王肯堂は、「蔵（經）中には『因明正理門論』の二訳がある。この論は大域龍樹菩薩の造るところであり、陳那の（因明）論は見るができない」と述べているので、王肯堂が『門論』を龍樹の撰述と見なし、陳那の『因明論』については散逸したと理解していたことは明らかである。ここで注目すべきは、「蔵」が何を指すのかの問題である。王肯堂の以前に成立した大蔵経は『高麗蔵』・『磧砂蔵』・『洪武南蔵』等の多数が挙げられるが、『門論』を「大域龍樹造」と記す蔵経は『磧砂蔵』・『洪武南蔵』・『永樂北蔵』しかない。このことを勘案すれば、「蔵」とはその三つの中のいずれかを指すものと推測できる。

では、なぜ『門論』の撰者は龍樹であるとなったのであろうか。そこで寡聞ながら、經典目錄や刊行蔵経等の諸本および関連する文献を精査し、その問題点を明らかにしていくにあたって、関連する記述を年代順にして以下に示すことにする。

初出文献	玄奘訳『門論』撰者について	義浄訳『門論』撰者について
『大慈恩寺三蔵法師伝』（彦悛撰、688年）	至案達羅国、南印度境。城側有大伽藍、彫構宏壯、尊容麗肅。前有石窠堵波（略）羅漢伽藍西南二十余里有孤山、上有石窠堵波、是陳那唐言授也、菩薩 ¹⁹⁾ 於此作因明論處。	なし
『南海寄帰内法伝』（義浄撰、691年）	なし	（略）因明著功、鏡徹陳那之八論。一観三世論、二観総相論、三観境論、四因門論、五似因門論、六理門論、七取事施設論、八集量論也。 ²⁰⁾
『大周刊定衆経目錄』（明佺等撰、695年）	因明正理門論一卷、陳那菩薩造、十二紙。右大唐貞観二十一年、三蔵玄奘從 ²¹⁾ 駕於翠微宮訳。出内典録。	なし
『開元釈教録』（智昇撰、730年）	因明正理門論本一卷、見内典録。大域龍樹菩薩造。初出、与義浄出者同本。貞	因明正理門論一卷、大域龍樹菩薩造。大唐三蔵義浄訳、新編入録第二訳。 ²²⁾

	觀二十三年十二月二十日、於大慈恩寺翻經院訖、沙門知仁筆受。 ²²⁾	
『貞元新定釈教目録』(円照撰、800年)	因明正理門論本一卷、見内典録。大域龍樹菩薩造、初出、与義浄出者同本。貞觀二十三年十二月二十五日、於大慈恩寺翻經院訖、沙門智仁筆受。 ²⁴⁾	因明正理門論一卷、大域龍樹菩薩造。第二出、与奘法師訳者同本。景雲二年於大薦福寺翻經院訖、沙門玄傘、智積筆受。 ²⁵⁾
『思溪藏』(1138年)	大域龍菩薩造 ²⁶⁾	大域龍菩薩造 ²⁷⁾
『高麗藏』(1251年)	大域龍菩薩造 ²⁸⁾	大域龍菩薩造 ²⁹⁾
『磧砂藏』(1273年)	大域龍樹菩薩造 ³⁰⁾	大域龍樹菩薩造 ³¹⁾
『洪武南藏』(1402年)	大域龍樹菩薩造 ³²⁾	大域龍樹菩薩造 ³³⁾
『永樂北藏』(1440年)	大域龍樹菩薩造 ³⁴⁾	大域龍樹菩薩造 ³⁵⁾
『嘉興藏』(1712年)	大域龍樹菩薩造 ³⁶⁾	大域龍樹菩薩造 ³⁷⁾
『乾隆藏』(1738年)	龍樹菩薩造 ³⁸⁾	龍樹菩薩造 ³⁹⁾

(諸藏經の成立年代は何梅氏〔2021〕49-120を参考する)

と。上の一覧を見ると、およそ次の二点が知られる。すなわち、年代的に見て『貞元新定釈教目録』(以下『貞元録』)以前の諸文献はすべて「陳那菩薩造」や「大域龍菩薩造」となっている点と、『磧砂藏』・『洪武南藏』・『永樂北藏』・『嘉興藏』においては「大域龍樹菩薩造」と記されている点の二点である。さらに『貞元録』とその前『開元釈教録』の記述を比較してみると、『貞元録』は「大域龍」の後に「樹」の一文字を付し、「大域龍樹菩薩造」となっていたことが知られる。このあり方を『磧砂藏』・『洪武南藏』・『永樂北藏』・『嘉興藏』も継承し、「大域龍樹」としているのである。この四つの藏經の中で『嘉興藏』を除き、あとの三つはいずれも真貴や王肯堂等の入師達以前に成立した大藏經である。

前述の通りに「大域龍樹菩薩は門論を造る」とは王肯堂撰『因明集解』の冒頭に明記される場所である。それに続く『因明集解』では、『門論』本文を用いるところが8箇所あり⁴⁰⁾、それらの箇所においては冒頭に「龍樹云」や「龍樹論云」と表記している。この二点を勘案すれば、「龍樹」は「大域龍樹」の略称であると考えてよいであろう。また、当時に作られた『洪武南藏』・『永樂北藏』においては、『門論』の玄奘・義浄訳は共に「大域龍樹菩薩造」と記さ

れていた。これらを勘案すれば、明の諸師は「大域龍樹」の四文字を「大域・龍樹」と読み、「大域」の二文字を省略して、「龍樹」と扱うことになったと、筆者は考えている。

以上で書誌学的検討をひとまず終え、次項からは教学的特色について論じていくことにしたい。

3. 能立・所立

そこで、まずは能立・所立の問題である。因明三支式の中で能立とは、所立の宗支に対する因・喩の二支をいい、これは能成立という。また、能破・似能破・現量等の因明の八門において、正しい宗・因・喩から構成する論式は、能破等に対して能立または真能立という。能立と所立について基は、「所立の宗にとって因・同喩・異喩をもって三支とし、これを能立とする」と述べている。基に対して「傍系」と位置付けられる定賓（713-742に活躍した）の著した『因明正理門論疏』では、「総摂門・相形門」という二種の能立が示されている。すなわち、「宗・因・喩の三支」においては所立の宗支に対する因・喩を能立とし、これを相形門と称した。また、「似能立・現量・似現量」等の七に対して相手に提示する宗・因・喩の三支も能立として、これを総摂門と称したのである。^{④①}

ところで、基の『因明大疏』等が散逸したことは周知のとおりであるが、定賓の『理門論疏』もまた、唯識学匠である善珠の『明灯抄』等の因明典籍に逸文を残すばかりである。「能立」を解釈する際に、『入論』には「此中宗等多言名為能立」と述べられていた。この文を明の人師達は自分なりに解釈して能立に関する自己の学説を展開していくのであるが、それらの学説を考察してみると、定賓と同様に「所立の宗支に対する因・喩を能立とし、似現量等の七に対する宗・因・喩の三支を能立とした」という二種能立の見解がまた見られる。定賓と基と異なり、「宗・因・喩の三支を能立とした」という一種能立もまた見られる。これは、真貴を初めとする真界・王肯堂・永海等の人師達によって説かれる二種類の能立であり、^{④②}明昱によって説かれる「三十三過」に陥らない宗・因・喩という能立に他ならないのである。なかでも特色だっているのは明昱である。明昱の因明に関する著述としては、『三支比量義鈔』・『因明直疏』の両書があるが、能立・所立に関するところは『因明直疏』の本文に四箇所、確認される。まず、冒頭には能立に対して、下記のように記している。すなわち、

能立与能破、及似唯悟他、現量与比量、及似唯自悟。此頌一論之綱宗、揭示八門二益之梗槩、欲令学者知其要也。能立者、三支無過。能破者、正顯其非。似能立者、三十三種過隨之（略）以前四門俱是顯示益他之義、故云悟他。唯自悟者、以後四門俱是自證自解境界、故云自悟。是以八門二益、總該一論之旨矣。^{④③}

と。ここで、「能立とは三支（宗・因・喩）に過（失）なし」と説かれている。これを見ると、次の点が知られる。すなわち、「能破等に対して宗・因・喩の三支を能立とする」という点と、「能立とする宗・因・喩は過失には陥らない」という点の二点である。この二点は能立に対する明昱の見解であると考えられる。また、『入論』にある「此の中に宗等の多言を名づけて能立と為す」という文に対しては、

此中宗等多言、名為能立、由宗因喩多言、開示諸有問者未了義故。謂此能立門中所詮宗因喩之多言無過、名為能立。^{④④}

とあるように、「この能立門の中に、宗・因・喩を詮するのところの多言には過なし、名づけて能立と為す」と述べている。「多言無過」について明昱は、さらに問答の型式をもって、詳しく論じている。すなわち、

問、何用三支方為能立。答、由宗因喩多言、方能開示諸有問者未了義故。謂諸問者不了諸法本因、於常無常等宗猶豫不決。論主立三支比量使知因為宗法、喩為明訓、於無常等宗了然自決矣。①又宗因喩、各有多理、名為多言。宗中多言有九、一現量不相違、二比量不相違、三自教不相違、四世間不相違、五自語不相違、六能別宗依極成、七所別宗依極成、八能所俱極成、九無相符極成。因中多言有三、一能成、二決定、三不相違。能成有四、一兩俱能成立敵共許故、二隨一能成敵者亦許故、三決定能成無猶豫故、四所依能成有有法故。決定有六。一決定非共、因於異品無故。二決定非不共、因於同品有故。三決定非同品一分轉、異品徧轉。四決定非異品一分轉、唯許同品宜徧轉。五決定非俱品一分轉。六決定非相違。不相違有四。一因不相違法自相。二因不相違法差別。三因不相違有法自相。四因不相違有法差別。喩中多言有二、一同喩、二異喩。一同喩有五、一同喩能成因、二同喩能成宗、三宗因俱能成、四三支配合辭。五辭不顛倒合。二異喩有五、一異喩能遣宗、二異喩能遣因、三宗因俱能遣、四三支配離辭、五辭不顛倒離。②應知多言皆理、為過則三十三過名似能立。^{④⑤}反過為理、亦三十三理名真能立。

と。①に示される「現量不相違・能所俱極成・因不相違法自相・辭不顛倒合」等は因明学における「三十三過」の反対面である。三十三過とは宗・因・喩をもって立論するにあたり、過失となる三十三種類である。「過に反して理と為す、また、三十三の理を真能立と名づく」と説かれるように、過失に陥らない宗・因・喩を能立としたのは明昱によってなされた見解である。このような能立・所立に関する説は、明昱の『因明直疏』にもう一箇所ある。すなわち、

已説宗因等如是多言、開悟他時説名能立。如説声無常者、是立宗言。所作性故者、是宗法言。若是所作見彼無常如瓶等者、是隨同品言。若是其常見非所作如虛空者、是遠離言。惟此三分説名能立。已説下、謂前已立三支無過、開曉於人故名能立。如説下釈成所立三支名義（略）復総結云、唯此宗因喩之三分無過、説名能立。⁴⁶⁾

と。これを見ると、明昱は「過失に陥らない宗・因・喩を能立とする」と主張したことが知られる。明昱によって説かれる能立に関すると、以上の4箇所しかないで、明昱は「宗・因・喩を能立とする」という一種のみを能立すると述べていたと考えてよいであろう。また、管見の限りでは、明昱以前の能立・所立に関する見解は、基の立てた「所立の宗にとって因・同喩・異喩をもって三支とし、これを能立とする」というものと、定賓や真貴・真界等の立てた「所立の宗支に対する因・喩を能立とし、相手に提示する宗・因・喩の三支を能立とする」というものの二説しかないのである。したがって、「過失に陥らない宗・因・喩を能立とする」という見解は、明昱独自の見解であったといつてよいであろう。

最後に明昱がなぜ、そのような見解を立てたのかといえ、恐らくは『演義鈔』の影響があったのではないかと考えられる。なぜならば、一つには『演義鈔』の記述は明代の人師達がしばしば用いるものであり、また今一つには『演義鈔』の記述と類似する点があるからである。まず、明昱以前に出る真貴・真界の因明の著述にも『演義鈔』の記述が引用されており、明昱と同時代の永海・王肯堂も同じく『演義鈔』の記述を引用している。特に王肯堂がそうである。⁴⁷⁾したがって、『演義鈔』が明の人師達や明昱の周りの人々に影響を及ぼしたことが窺えるのである。

そこで、明昱の『因明直疏』と『演義鈔』の記述を対比してみると、およそ次のようになるであろう。

『演義鈔』	然準因明總有八義、今此有四故。論云能立與能破、及似唯悟他、現量與比量、及似唯自悟。謂能立能破現量比量、此之四義各有真似、故成八耳。言八義者、一對敵申量三分圓明、開曉於賓故名能立。二斥量非圓彈支有謬、示悟於主故名能破。三對敵申量三支缺謬、非曉於敵故名似立。 <u>四妄斥非圓彈支有謬、不悟於主故名似破。</u> 五於色等義有正智生、自相處轉故名現量。六謂藉眾相而觀於義、相應智起故名比量。七有分別智於義異轉、了餅衣等名似現量。八以似因智於似所比相違解起、名似比量。 ⁴⁸⁾
『因明直疏』	能立與能破、及似唯悟他、現量與比量。及似唯自悟、此頌一論之綱宗、揭示八門二益之梗槩、欲令學者知其要也。能立者、三支無過。能破者、正顯其非。似能立者、三十三種過隨之。似能破者、不定不成等謬斥。現量者、謂離名言所有分別。比量者、 <u>謂藉眾相而觀於義。</u> 似現量者、於義異轉。似比量者、 <u>不能正解。</u> 唯悟他者、以前四門俱是顯示益他之義、故云悟他。唯自悟者、以後四門俱是自證自解境界、故云自悟。 ⁴⁹⁾

（黒字は全く同一、二重線は意味同じ）

上記のように、『演義鈔』と『因明直疏』の記述は、相違するところが見られない。一方、意味の通じるところは4箇所あり、また文字が同一である文章が2箇所もある。したがって、明昱の『因明直疏』は『演義鈔』の影響を受けた可能性が高いといつてよい。また、上表の『演義鈔』の記述はその前の書目に全く見られない。これらの点より、『演義鈔』の影響を受けた上で『入論』に出る「三十三過」を用いて、明昱は「過失に陥らない宗・因・喩を能立とする」との見解を案出していたことが推測できるのである。

このような展開が能立・所立についてなされた点に、明代因明学の特色の一つがあるといつてよいであろう。そして、このような教学的特色はまた、現量説においても見いだすことができるのである。

4. 現量説

現量は比量とならび、陳那の因明学における正しい知識手段の一つであり、概念化作用を伴わず（無分別）、認識対象そのものの個別相（自相）をそのままに認識するあり方に他ならない⁵¹。現量に関しては、『門論』と、その入門書である『入論』において、それぞれ「離一切種類名言仮立無異諸門分別」、「離名種等所有分別」と述べている⁵²。ここでいう名言種子とは何かといえ、善・悪・無記の諸法を生じる親因縁をさす。これに表義名言と顕境名言の二種があるが、義理を表す名句文によって薫習された点をもって表義名言種子と称し、境を了別（認識）する心・心所によって薫習された点をもって顕境名言種子と称している⁵³。『門論』と『入論』の記述を見る限り、「種類名言分別」や「名種分別」を離れるのは、陳那と商羯羅主の現量説の中での共通点の一つであったと考えてよいであろう。

このうち「名種分別」については、現存する唯一の『門論』注釈書である『理門論述記』には「似喩の倒合」までの部分しか現存していないので、「名種分別」に対する見解は見出すことができない。わずかに基の『因明大疏』において、「名言・種類の分別」との解釈が見られるばかりである。また、基一系からの批判を受けた文軌の『因明入正理論疏』には、直接の言及は見られないものの、関係する箇所「不帶名言」という言葉が見いだされる。これに対して、明昱を初めとする明の人師達においては、従来の現量説と異なる学説が示されていた。すなわち、『入論』にある「名種分別」を「名種の分別」と読み取った上で、『撰大乘論釈』に出る「名言種子」の言語を用い、「現量には名言種子の分別なし」という見解が示されていたのである。そのような見解は明の因明学における特色の一つといっても過言ではないだろう。これを以下に順次に検討していくため、まずは『因明大疏』を確認したい。そこには、

論、離名種等所有分別。述曰、此所離也。謂有於前色等境上、雖無映障、若有名種等諸門

分別亦非現量。故須離此名言分別、種類分別等取諸門分別。故理門論云、遠離一切種類名言假立無異諸門分別。言種類者、即勝論師大有同異、及數論師所立三德等。名言即目短為長等、皆非稱實名為假立。一依共相轉、名為無異。諸門六句常無常等、或離一切種類名言、名言非一故名種類。⁵⁵

とある。『入論』本文の冒頭には「論」と記し、これに対する注釈の冒頭には「述曰」と表記する。「離名種等所有分別」を「名・種・等」と読み分けた上で、基の『因明大疏』は「名言分別、種類分別、諸門分別」を離れることが現量であるという説を示している。また、文軌の『因明入正理論疏』においては「現量は名言を帯びず」と述べている。すなわち、

能立与能破、及似唯悟他、現量与比量、及似唯自悟。述曰、文有三分、一總標綱要分、二依標別解分、三結略示広分。如其次第、即初頌、次長行、後頌也。此即初分、於中義開八、合為兩悟、合前四門為悟他、合後四門為自悟（略）後四門者、五現量、証法自相、不帶名言、如鏡鑑形故名現量。⁵⁶

とある。文軌の『因明入正理論疏』は「似因の所依不成」以降の部分が散逸しているので、現量に対する直接の解釈を見出すことはできない。しかし、傍線部に示される通り、『入論』冒頭の一頌を注釈する際に、「法（事物）の自相（個別相）を証（認識）し、名言を帯びず。鏡の形を鑑みる如きが故に現量と名づける」と述べられていた。したがって、「自相を証し、名言を帯びず」というのは現量に対する文軌の見解であったと見てよいであろう。もしそれに従えば、「名言を帯びず」は文軌の「名種分別」に対する見解であったと推測できる。以上の観点よりすれば、「現量は名言、種類の分別なし」は、『入論』・『門論』を翻訳した当時の人師達の共通する見解であったと見てよいであろう。換言すれば、これはインド以来の伝承を受けた人師達の現量に対する見解であったといっても過言ではないであろう。

しかし、明代に至ると、これらの著述がすべて散逸してしまった。そして、明の唯識諸師は、当時存在する書籍に残される『因明大疏』の逸文を参考にしながら、独自に因明学の研鑽を行い、「名言種子の分別なし」という学説を案出したのである。現存する明代の諸文献において「離名種分別」に関するものは『入論』注釈書しかないが、それらを考察してみると、明昱の『因明直疏』、智旭の『因明直解』⁵⁷はともに「名種分別」を「名言種子分別」と解釈していたことが知られる。両書の撰述年について、『因明直疏』の冒頭には1612年に著したという序がある。⁵⁸一方の『因明直解』には撰述年を明確にする記述がない。しかし、『新統高僧伝』に出る智旭の史伝によれば、⁵⁹智旭は1622年に仏教を信仰するようになる以前は、仏教への批判文章を

書いていたことが確認できる。したがって、仏教典籍の注釈書としての『因明直解』は仏教の信仰に転向して以降のものであったと考えてよいであろう。その点よりすれば、『因明直解』の撰述年は1622年以降であったと推測できる。これらの点を勘案すれば、『因明直解』は『因明直疏』の後に成立した可能性が高い。そこで以下、明代における因明学の特色の一つである現量説を解明していきたい。

まずは、明昱の現量説を検討してみる。『入論』を解釈するに伴い、『因明直疏』⁶⁰においては現量がしばしば論じられている。「冒頭」・「現量相違」・「現量」・「似現量」の四箇所を注釈するところにおいて、明昱は自らの現量説を述べている。特に「現量」・「似現量」においては、「現量には名言種子の分別なし」とあるような特色ある学説を示していた。すなわち、

通上二積似能立門竟、下三積現量門。①復次為自開悟、当知唯有現比二量。此中現量謂無分別。若有正智、於色等義、離名種等所有分別、現現別轉、故名現量。復次下、双標二量者、以現比量俱是自証自解境界、故云為自開悟。②此中現量謂無分別者、標定現量是不起分別義。若有下積成、謂正智起時、於色声香味触辺、不起名言種子所有分別。而能於五塵上現現別轉、故名現量。⁶¹

とある。傍線部①は『入論』の本文であり、傍線部②は明昱の注釈である。ここで『入論』のいう「色等の義に於いて名種等の所有分別を離れる」に対して、「色声香味触の辺に於いて名言種子の所有分別を起こさず」と述べているから、『因明直疏』では「名種等所有分別」を「名言種子所有分別」と解釈していたことが知られるのである。では「種子」は「種類」の誤りであろうか。『因明直疏』では「名言種子」を詳しく述べているから、「種類の誤り」ではないと考えられる。それを示すと、次のようになる。すなわち、

名言種者是習所成。明記不忘、念念熏習、成種子義。如孩孺時、眼見於色、人言為色、積習於心。耳聞於声、人言為声、積習於心。日積月累熏成種子、後於声色門中、從種發起声色名言、謂之名種。今說離名種等所有分別、而又言現現別轉者、是於声色門中無分別義、如鏡現像歷歷分明。是於五塵現現別轉、鏡無留礙是離名種所有分別。⁶²

と。「名言種とはこれ習い成ずるところなり。明記して忘れず、念々熏習し、種子の義を成ず」と述べているように、明昱においては明らかに「名言種子」として論じられている。したがって、明昱は『入論』に出る「名種」を「名言種子」と考えていたといってよい。これについては、「似現量」の箇所からも窺うことができる。すなわち、

四釈比量門竟、下五釈似現量門。有分別智於義異転、名似現量（略）智有分別、於諸法中不証自相、隨起名言、名為異転。由不了知無常等義、又非比量、但於見聞隨起名言種子所有分別、名似現量。故釈云、謂諸有智了瓶衣等、分別而生。何以故、由彼於義不以自相為境界故。⁶³

と。誤りの現量である「似現量」を解釈する際に、「見聞に於いて名言種子所有の分別が随って起こるを似現量と名づける」とは明昱の『因明直疏』に示されるところである。これを見ると、似現量を現量に反するものとして解釈していたことが知られる。その点からすれば、「名言種子の分別が起こる」という似現量に対して、「名言種子の分別なし」というのが明昱の現量についての見解であったといつてよい。この見解は明代以前文献においては見出すことができない。『因明直解』には見られるが、この書もまた明昱の『因明直疏』の後に成立したことは、すでに述べた通りである。したがって、このような現量説は明昱が初めて説いたものであったと考えられるのである。

ではなぜ、このような見解を明昱は案出したのであろうか。これについて、関係する文献を検討した結果、インド以来の伝承が絶える時代にいた明昱は、『入論』の本文を自分なりに読み取り、「名種等所有分別」を「名種分別」と句読した上で、当時存在した『宗鏡録』等に残される「名言種子」の言語を用いて、上記のような解釈を行なったと考えられるのである。この点については、『入論』本文を参照にした『因明直疏』の文からも窺うことができる。一覧にすると次の通りである。

『入論』の本文	『因明直疏』の注釈
此中現量謂無分別	此中現量謂無分別者標定現量是不起分別義
若有正智於色等義	若有下釈成、謂正智起時於色声香味触辺
離名種等所有分別	不起名言種子所有分別
現現別転故名現量	而能於五塵上現現別転、故名現量

上表に示される通り、『入論』に出る「離名種等所有分別」に対して、明昱の注釈文は「不起名言種子所有分別」である。これを見ると、明昱は「名種分別」と句読していたことが知られるのである。

一方、名言種子の理論は無著撰『摂大乘論』の「所知依分」に遡ることができるが、その言語の文献上の初出は玄奘訳の無性『摂大乘論釈』である。『摂大乘論』では、第八識の存在を証明する「粗重相・軽安相・有受尽相・無受尽相・譬喩相・具足相・不具足相」という七種相

の内の無受尽相において、「名言熏習種子は無始の時より来た、種々戲論して流転せる種子の故に」⁶⁴が示される。それを注釈する玄奘の翻訳した無性の『摂大乘論釈』では、「一切の名言はみな本旧の名言種子に因り」⁶⁵と説かれている。『成唯識論』や基の『成唯識論述記』や慧沼の『成唯識論了義灯』、および『華嚴疏』・『演義鈔』・『宗鏡録』・『問答』等にも見られるが、明昱の活躍した明代においては無性の『摂大乘論釈』・『成唯識論』・『華嚴疏』・『演義鈔』・『宗鏡録』・『問答』しか現存していない⁶⁶。その中では、『成唯識論』・『問答』において「名言習気」の用語が見られ、『華嚴疏』・『演義鈔』・『宗鏡録』においては「名言種」・「名言習気」の用語が見られる⁶⁷。「名言種子」の用語は無性の『摂大乘論釈』にしか見られない。更に言えば、1612年に成立した『因明直疏』の前に著された明昱の『成唯識論俗詮』には無性『摂大乘論釈』の本文がしばしば引用されており、それらの本文において種子に関する記述が見られるのである⁶⁸。これらの点よりすれば、明昱は無性の『摂大乘論釈』にある「名言種子」の言語を用いた可能性が高いのである。

5. むすび

本研究においては、明の因明著作を検討した上で、その教学の特色を明らかにした。『入論』・『唯識比量』に対する研鑽は普泰の法孫である洪恩以降に始まったが、明の唯識諸師は無性『摂大乘論釈』や『演義鈔』等の当時に存在する書籍を参考にしながら、特色ある見解を示していったのである。

しかし、明代における因明学の研究を進めるにあたって事前に明らかにしておくべき問題は『門論』の撰者にあった。本来は、「陳那」や「大域龍」と訳されたディグナーガの書籍であったにもかかわらず、明代に存在する『洪武南蔵』・『永楽北蔵』では「大域龍樹菩薩造」としていたのである。「大域龍樹」を「大域・龍樹」と句読して「大域」の二文字を省略し、明の諸師は『門論』を「龍樹」の著述と見なしたのである。本稿ではそのことを指摘した上で、明代の唯識教学展開の第二段階において『入論』・『唯識比量』に対する唯識諸師の注釈書によって展開された学説が、「明代の因明学」であったことを明らかにした。その際、本稿において指摘したのは、明昱が『演義鈔』の影響を受けて『入論』に出る「三十三過」を用い、「過失に陥らない宗・因・喩を能立とする」という見解を案出したことである。また、『入論』の本文を自分なりに注釈して、無性の『摂大乘論釈』に出る「名言種子」を用い、「名言種子の分別なし」という現量説を展開したことも明らかにした。

このような明代の因明説は、清の初期の十八世紀に影響を及ぼしたと考えられる。なぜならば、朝廷によって開版された『乾隆蔵』(1733-1738)において、「龍樹造」として『門論』の二訳が収録されていたからである。「明末の四大師」とされた智旭の『因明直解』では、「名種

等所有分別」という『入論』の本文を「名言習気種子所有虚妄随念计度二種分別」と読み取っていたが、これもまた明昱の『入論』本文の読み方からの影響を窺うことができる。また、清の乾隆年間（1702-1781）に成立した『因明入正理論後記』においても『因明直疏』がよく引用されており、明昱の現量に関する見解が受容されていたことが窺える。⁶⁹

なお、「宗依・宗体」に対する明の諸師の解釈について、先行研究では本文を2箇所のみ取り上げて、真貴が「宗体は後陳である」と主張したと指摘していた。しかし、『真貴解』を検証してみると、「宗依・宗体」の言及は少なくとも、5箇所も見出すことができた。それらの箇所を考察した結果、真貴は「前陳と後陳とを合わせて立者の意図に従うあり方」を宗体とした。さらに言えば、『宗鏡録』に残される『因明大疏』の逸文からの影響があった明の諸師は、宗を宗依・宗体に区分した。その上で上記の見解に対して、「宗依は前陳であり、宗体は後陳である」とする見解は、真界を初めとする明昱等にも引き継がれていったのである。これについては紙幅の関係より今後の課題に譲ることとし、ここで述べない。

このたび、検討した「能立・所立」および「現量説」は明代の因明学における特色の一つであり、印度以来の因明学においては唯識教学の伝承が絶える中で、中国において展開された独自の学説であったと考えている。その点よりいえば、明代における因明学は明の唯識教学発展の第二段階において展開された学説であったといつてよいであろう。以降は本研究を基盤としてさらに、明の唯識諸師による因学説の研究を進めていきたい。また、明代の因明著作に対する江戸時代の人師の著した複注が確認されたことも考え合わせれば、十六・七世紀における日中の因明学の相互交流までをも考察すべきではないかと考えている。

略 号

T = 『大正新修大蔵経』 Z = 『卍新統蔵経』

【例】 T48、718b は『大正新修大蔵経』第四八巻、第七一八頁、中段を意味する。

【例】 Z38、718a は『卍新統蔵経』第三八巻、第七一八頁、上段を意味する。

参考文献

<一次資料>

真諦訳・無著造「摂大乘論」『大正新修大蔵経』31巻。

玄奘訳・無著造「摂大乘論本」『大正新修大蔵経』31巻。

玄奘訳・無性造「摂大乘論釈」『大正新修大蔵経』31巻。

「百法明門論」『大正新修大蔵経』31巻。

「成唯識論」『大正新修大蔵経』31巻。

「因明正理門論本」『大正新修大蔵経』32巻。

「因明正理門論」『大正新修大蔵経』32巻。

「因明入正理論」『大正新修大蔵経』32巻。

- 「理門論述記」『大正新修大藏經』44巻。
- 「成唯識論述記」『大正新修大藏經』43巻。
- 「成唯識論掌中樞要」『大正新修大藏經』43巻。
- 「成唯識論了義灯」『大正新修大藏經』43巻。
- 文軌「因明入正理論疏」『卍新統藏經』53巻。
- 「因明入正理論疏」『大正新修大藏經』44巻。
- 「大乘法苑義林章」『大正新修大藏經』45巻。
- 「大唐大慈恩寺三藏法師伝」『大正新修大藏經』50巻。
- 「大唐西域記」『大正新修大藏經』51巻。
- 「唐高僧伝」『大正新修大藏經』50巻。
- 「大唐内典録」『大正新修大藏經』55巻。
- 「古今訳経図紀」『大正新修大藏經』55巻。
- 「開元釈教録」『大正新修大藏經』55巻。
- 「南海寄帰内法伝」『大正新修大藏經』55巻。
- 「大周刊定衆経目録」『大正新修大藏經』55巻。
- 「貞元新定釈教目録」『大正新修大藏經』55巻。
- 「大方広仏華嚴経疏」『大正新修大藏經』35巻。
- 「華嚴経随疏演義鈔」『大正新修大藏經』36巻。
- 「宗鏡録」『大正新修大藏經』48巻。
- 「円覚経疏鈔随文要解」『卍新統藏經』10巻。
- 「東域伝灯目録」『大正新修大藏經』55巻。
- 「注進法相宗章疏」『大正新修大藏經』55巻。
- 「新編諸宗教蔵総録」『大正新修大藏經』55巻。
- 「唯識開蒙問答」『卍新統藏經』55巻。
- 「八識規矩補註」『大正新修大藏經』45巻。
- 「大乘百法明門論解」『大正新修大藏經』44巻。
- 「相宗八要」『卍新統藏經』55巻。
- 「相宗八要解」『卍新統藏經』55巻。
- 「成唯識論俗詮」『卍新統藏經』50巻。
- 「成唯識論証義」『卍新統藏經』50巻。
- 「観所縁縁論会釈」『卍新統藏經』51巻。
- 「観所縁縁論直解」『卍新統藏經』51巻。
- 「観所縁縁論釈記・附問答釈疑」『卍新統藏經』51巻。
- 「観所縁縁論釈直解」『卍新統藏經』51巻。
- 『因明入正理論集解』1592年刻本、北京国家図書館蔵。
- 「因明入正理論解」『卍新統藏經』53巻。
- 「因明入正理論集解」『卍新統藏經』53巻。
- 「因明入正理論直疏」『卍新統藏經』53巻。
- 「因明入正理論会義」『明清『因明入正理論』珍稀注釈選輯』。
- 「因明入正理直解」『卍新統藏經』53巻。
- 「三支比量義鈔」『卍新統藏經』53巻。
- 「唐装師真唯識量略解」『卍新統藏經』53巻。

「閔藏知津」『嘉興藏』新文豐版。

「因明入正理論後記」『国家図書館善本仏典』28冊。

「新統高僧伝」『大藏經補編』27冊。

＜二次資料＞

小野玄妙氏『仏書解説大辞典』、大東出版社[1933]。

結城令聞氏『唯識学典籍誌』、大蔵出版社[1962]。

武邑尚邦氏『因明学一起源と変遷一』、法蔵館[1986]。

周叔迦氏『仏学論著』巻上[1991]。

竺沙雅章氏『宋元仏教文化史』、汲古書院[2000]。

聖巖氏『明末仏教研究』、宗教文化出版社[2006]。

宇井伯寿氏『佛教辞典』、大東出版社[2007（初版1938）]。

陽維中氏「明代普泰・高原明昱系唯識学伝承考述」、『覚群佛学』[2012]。

吉村誠氏『中国唯識思想史研究』、大蔵出版会社[2013]。

簡凱廷氏「晚明義学僧一雨通潤及其稀有著作考察述」、『台湾大学文学院佛学研究』第28期[2014]。

簡凱廷氏「晚明唯識学作品在江戸時代の流伝与接受初探」、『中華佛学研究』第16期[2015]。

倪梁康氏「王肯堂及其『八識規矩集解』」、『中山大学学报』社会科学版卷55[2015]。

野川博之氏『明末仏教の江戸に対する影響』、山喜房佛書林[2016]。

簡凱廷氏「被遺忘の伝統一明末清初『成唯識論』相關珍稀注釈書考論一」、『台湾国立清華大学漢学研究』35巻第1期[2017]。

何歆歆氏「『陳那』の名称に関する考察」『国際仏教学大学院大学研究紀要』21号[2017]。

林鎮国・簡凱廷氏編『近世東亜『観所縁縁論』珍稀注釈選輯』、仏光文化[2018]。

中村元氏『岩波仏教辞典』、三省堂[2019（初版2000）]。

演真氏「普泰新論一大興隆寺考弁一」、『第三回中国仏教史論壇論文集』[2019]。

演真氏『大乘百法明門論解』弁偽、『唯識学年会論文集』[2020]。

拙著『『因明正理門論』注釈書の研究一大特に定賓撰『理門論疏』を中心として一』、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』42集[2020]。

何梅氏『歴代漢文大蔵経目録新考』社会科学文献出版社[2021]。

陳帥・簡凱廷氏編『明清『因明入正理論』珍稀注釈選輯』、仏光文化[2021]。

陳帥氏「明清因明史上被忽視の一環一明釈真貴『因明入正理論集解』評析一」、『佛光学報』第7巻第2期[2021]。

陳帥氏「基於新見文献的明清因明史重建」、『台湾大学文学院佛学研究』第42期[2021]。

陳帥氏「基於『差別性故』相關詮釋的漢轉因明學術史考察」、『中國文哲研究』第60期[2022]。

陳帥氏「從陳那到『龍樹』一新見清代慧善『因明入正理論略疏』評釈一」、『中国學術』44集[2023]。

陳帥氏「基於新見文献的明清因三相考察一兼論明清因明的學術價值一」、『哲学研究』2003年第1期[2023]。

陳帥氏「明清因明喻支詮釋中的誤讀与重塑」、『哲学与文化』589期[2023]。

拙著「明代における唯識教学展開の一考察」、『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』24号[2024]。

註

① 拙著[2024]を参照すること。

② 武邑氏[1986]、25。

③ T50、262b-c。

- ④ 1319年以前に撰述された雲峰の『問答』では『因明大疏』の本文がよく引用されており、「立三量」において、7箇所が確認できる（Z55、338b8-14・338b19-23・338b23-c3・338c9-12・338c12-15・338c15-17・338c18-339a10）。その点により、『問答』の撰述当時、『因明大疏』は存在したと推測する。なお、『問答』の撰年は竺沙雅章氏「2000」、21の指摘による。
- ⑤ Z53、917c-918a。
- ⑥ T48、717c-720c。
- ⑦ 『問答』については「注5」に示される。
- ⑧ 無性の『撰大乘論釈』・『成唯識論』・『華嚴疏』・『演義鈔』・『宗鏡錄』は明の時代に成立した『洪武南藏』・『永樂北藏』・『嘉興藏』に収録され、何梅氏[2021]94・1019・1021・1067-1069・1209を参照する。『成唯識論俗詮』には「然開蒙之作、出於元人、尔時慈恩疏鈔似猶在也。余始聞唯識宗旨於紫柏大師、授以此論、命之熟究。茫無入處、求古疏鈔、已不可得。後閱開蒙、及檢宗鏡華嚴疏鈔（Z50、503a）」という1612年に王肯堂の書いた序あり、それによると、王肯堂は元の時代の人師が著した「開蒙」を読んだことが知られる。また、明の万歴（1573-1636）の間に刊行した『問答』が現存するので、『問答』は明の時代に存在すると考えられる。
- ⑨ 陳・簡氏[2021]、566。
- ⑩ 陳氏[2022]。
- ⑪ 『因明正理門論本』という通称は智昇撰『開元釈教錄』（730）以降に定着していた、拙著[2020]。
- ⑫ 何歆歆氏[2017]。
- ⑬ 陳氏『中国學術』[2023]。
- ⑭ 『真貴解』中国国家図書館蔵、書号08325：慧鏡序・丁13右・14右・15左-右・15右・17左・17右・18左・同前・29左・30左・30右・56左。
 真界『因明論解』：Z53、910・910c-911a・911a・912c・912c・913a・917a。
 王肯堂『因明集解』：Z53、922b・922c・923a-b・924b-c・924c・924c-c925a・928b・929b-c・931b・931b-c・931c。
 明昱『因明直疏』：Z53、936a・936a・936b。
 永海「因明入正理論會義」、『明清『因明入正理論』珍稀注釈選輯』：194・194-195・196・209・213・257・269・273-274・274-275・276。
- ⑮ 丁6右。
- ⑯ Z53、909b。
- ⑰ 陳・簡氏[2021]、277。
- ⑱ Z53、918c-919a。
- ⑲ T50、241b。
- ⑳ T55、229c-230a。
- ㉑ T55、407b。
- ㉒ T55、556C。
- ㉓ T55、609a。
- ㉔ T55、856b。
- ㉕ T55、868a。
- ㉖ 中国国家図書館中華古籍資料庫による検索。
- ㉗ 同上
- ㉘ 『影印海印寺藏原本高麗藏』線装書局[2004]32冊、357。

- ②⑨ 同上32冊、411。
- ③⑩ 『影印磧砂大藏經』線装書局[2005]53冊、23。
- ③⑪ 同上53冊、35。
- ③⑫ 『原版精縮洪武南藏』四川仏教協會出版[1999]88冊、173。
- ③⑬ 同上88冊、192。
- ③⑭ 『永樂北藏』線装書局[2005]104冊、683。
- ③⑮ 同上104冊、661。
- ③⑯ 『影印嘉興藏』民族出版社[2008]778冊、1232。
- ③⑰ 同上。
- ③⑱ 『新版精縮乾隆大藏經』宝印仏経流通処[1999]88冊、719。
- ③⑲ 同上88冊、701。
- ④⑩ Z53、922b・922c・924b-c・924c-c925a・928b・929b-c・931b・931c。
- ④⑪ 拙著[2020]。
- ④⑫ 現存する明代『入論』の注釈書において、『真貴解』は最古のものである。冒頭には四人の序があるが、中で最も早いのは万暦十一（1583）年である。したがって、本書は1583年以前に成立したことが推測できる。
- 『真貴解』：「然能立法有二、一者三支皆名能立（略）二者唯取因与二法為能立、以因即宗家因由所以，喻乃因中一分義撰、由因与喻成立宗義、故名能立。後云能立不成、意明反此則成能立（九左-右）」。
- 真界撰『因明論解』：「此中宗等多言、名為能立、由宗因喻多言、開示諸有問者未了義故。此中者、即簡持論中也。等者、等余因喻（略）然能立有二。一三支為能立、以宗因喻多言、名能立故。二因喻為能立、以因即宗家之因、喻乃因中所撰。由因与喻、成其宗法、故為能立。此即以宗為所立也（Z53、909-910）」
- 王肯堂撰『因明集解』：「此中宗等多言名為能立、由宗因喻多言、開示諸有問者未了義故。言此中者、起論端義（略）初句拈法標名。宗等、等余因喻。能立有二、一三支為能立、対問者得名。二因喻為能立、対宗得名。今即前義也、故結云、如是三分說名能立（Z53、919a）」
- ④⑬ Z53、933a。
- ④⑭ Z53、933b。
- ④⑮ Z53、933b-c。
- ④⑯ Z53、934c-935a。
- ④⑰ 『真貴解』：「大疏云、一真能立、謂対敵伸量三分円明、開曉於賓故。二真能破、謂斥量非円彈支有謬、示悟於主故。三似能立、謂対敵伸量三分缺謬、非曉於敵故。四似能破、謂誤斥非円彈支有謬、不悟於主故。五真現量、謂於色等義有正智生、自相処転故。六真比量、謂藉衆相而觀於義、相応智起故。七似現量、謂有分別智於義異転、了瓶衣等故。八似比量、謂以似因智於所比義、相違解起故。（7左-右）」
- 真界『因明論解』：「此立八門、以総撰諸論要義也。八門、謂真具四門、似含四門也。一真能立、謂対敵申量三分円明、開曉於賓故。二真能破、謂斥量非円彈支有謬、示悟於主故。三似能立、謂対敵申量三分闕謬、非曉於賓故。四似能破、謂妄斥非円彈支有謬、不悟於主故。五真現量、謂於色等義有正智生、自相処転故。六真比量、謂藉衆相而觀於義、相応智起故。七似現量、謂有分別智於義異転、了瓶衣等故。八似比量、謂以似因智於所比義、相違解起故。悟他者、由能立破皆能啓他未了之義故。自悟者、由現比量能引真似有無分別二智故。此上皆引清涼疏鈔義釈。（Z53、909c）」

王肯堂『因明集解』：「此之一偈、総有八義。一真能立此標名下積義謂對敵伸量積上能立二字三分円明謂不缺明謂不謬此積真字開曉於他故由所立真故即能生他智果下反此可知二真能破、謂斥他支量非円有謬、示悟於主故。三似能立、謂對敵伸量三分闕謬、非曉於敵故。四似能破、謂妄斥他量非円有謬、不悟於主故。五真現量、謂於色等義有正智生、自相處転故無分別智得境自性六真比量、謂藉衆相而觀於義如見煙知火相應智起故。七似現量、謂有分別智於義異転不称実境而知故了瓶衣等故瓶衣仮合非真現量境八似比量、謂以似因智於所比義、相違解起故。悟他自悟、即二益也。悟他者、由能立破皆能啓他未了義故。自悟者、由現比量能引有無分別二智故（黒字は割注。Z53、919b）」。

王肯堂『成唯識論集解』：「對敵申量三分円明、開曉於賓名真能立。斥量非円彈文有謬、示悟於主名真能破。對敵申量三分缺謬、非曉於敵名似能立。妄斥非円彈文有謬、不悟於主名似能破（Z50、663a）」。

永海『因明入正理論會義』：「此之一偈総有八門二益、一論宗綱下門自釈。若欲預知、略標梗概。一真能立、謂對敵伸量三分円明、開曉於他故、以能立量円而不缺明而不謬、由所立真故即能生智果故。二真能破、謂斥他支量非円有謬、示悟於主故。三似能立、謂對敵伸量三分闕謬、非曉於敵故。四似能破、謂妄斥他量非円有謬、不悟於主故。五真現量、謂色等義有正智生、自相處転故。六真比量、謂藉衆相而觀於義、如見煙知火、相應智起故。七似現量、謂有分別智於義異転不称実境而知故了瓶衣等故、瓶衣仮合非真現量境。八似比量、謂以似因智於所比義、相違解起故。悟他自悟、即二益也（陳・簡氏[2021]、182-183）」。

王肯堂に應じ、明昱は『成論』を講じながら1603年にその注釈書を作成した。（Z50、505c）

④⑧ T36、284b-c。

④⑨ Z53、933a。

⑤⑩ 清遠（生没不明）の『円覚經疏鈔隨文要解』（Z10、40a）にも見られるが、冒頭の序（Z10、12b）によると、1213年に成立したことが知られる。従って『演義鈔』の後に成立したと考えている。

⑤⑪ 中村氏[2019]、295を参考する。

⑤⑫ 『入論』では十四過類と九句因を省いて能別不極成等の四種類の過失を増やして決定相違の問題を解決して『門論』の思想を能立等の八門に体系づけ、『門論』の因明思想を解釈した。そのため、『入論』は『門論』の入門書や綱要書の面があるとは考えている。

『門論』：「此中現量除分別者、謂若有智於色等境、遠離一切種類、名言、仮立、無異、諸門分別。由不共縁現現別転、故名現量」（T32、3b）。

『入論』：「此中現量、謂無分別。若有正智於色等義、離名種等所有分別、現現別転故名現量」（T32、12b）。

⑤⑬ 宇井氏[2007]、1018を参考する。

⑤⑭ 基の『因明大疏』では、「改論云差別為性、非直達因明之軌轍、亦乃闇唐梵之方言」と非難している。文軌の名前を明記したわけではないが、基の門下の慧沼が「差別為性」と改めたのは軌であると指摘している。拙著[2020]を参考すること。

⑤⑮ T44、139a-b。

⑤⑯ Z53、681a。

⑤⑰ 『因明直解』：「此中現量、謂無分別。若有正智、於色等義。離名種等所有分別現現別転、故名現量。現者顯現分明也、量者度量楷定也。無分別者分別有三種、一自性分別、二隨念分別、三計度分別（略）今且就前五識及同時意識以弁其相、故云、若有正智於色声香味触法之義、離於名言習氣種子所有虛妄隨念計度二種分別、各於自相分境現現別転故名現量。言色等義者、六塵本是六

識自所變相。非心外法、無性無生、不屬名言也。」(Z53、949a-b)。

- ⑤⑧ 『因明直疏』：「自契師始訖、永明繼陳、漸爾鮮聞、邈焉垂絕。高原大師遠統余光、志興厥旨（略）余企慕斯文、慶逢法席、愧無所詣、為師鼓吹、冀諸同志、無泯斯因。萬曆歲次壬子（1612年）端陽前二日、武林後學大善和南、書於南屏山中」（Z53、932b-c）。
- ⑤⑨ 『新統高僧傳』：「智旭字素華、晚稱藕益老人、姓鍾氏、吳人也。父岐仲持大悲咒十年、母金氏夢大士抱兒授之、遂生子。旭七歲聞父訓、甘蔬食不逐腥羶。年十二就傳讀書、日聆師說即以聖學自任、作關弘論數十篇、復進酒肉。弱冠（二十歲）閱蓮池自知錄、敘及竹窗隨筆、乃取所著論焚之。年二十、詮論語至天下婦仁、不能下筆廢寢食（略）夢礼憨山、涕泣言、自恨緣慳相見大晚。憨山云、此是苦果應知苦因。語未竟遽請曰、弟子志求上乘、不願聞四諦法。憨山云、且喜居士有向上志。時憨山在曹谿、不能往從、乃從其徒雪嶺剃度、明天啓二（1622）年也」（『大藏經補編』27、94a-b）。
- ⑥⑩ Z53、933a・935a・940a・940c。
- ⑥⑪ Z53、940a。
- ⑥⑫ Z53、940b。
- ⑥⑬ Z53、940c。
- ⑥⑭ T31、137b-c。真諦訳は「粗重相・細輕相・有受相・不受相・譬喻相・具相・不具相」とされていた（T31、117c-118a）。
- ⑥⑮ T31、398b。無性『攝大乘論釈』は玄奘訳しかない。
- ⑥⑯ 同「注9」。
- ⑥⑰ 『成唯識論』：「次生死相續由諸習氣。然諸習氣總有三種、一名言習氣謂有為法各別親種。名言有二、一表義名言即能詮義音声差別、二顯境名言即能了境心心所法。隨二名言所熏成種、作有為法各別因緣。二我執習氣、謂虛妄執我我所種。我執有二、一俱生我執即修所斷我我所執、二分別我執即見所斷我我所執。隨二我執所熏成種、令有情等自他差別。三有支習氣謂招三界異熟業種（T31、43b）」。
- 『華嚴疏』：「業是所造心是能造、並皆速滅、起時不言我起、滅時不言我滅、何能有体而得相生成種種耶。第二對約得報果時難能所受。謂受是報因、即名言種為業所引、受所受報。離報無受、故云受不知報、離受無報、故云報不知受（T35、602b）」。
- 『演義鈔』：「疏第二對約得報果時難能所受等者、此報受不知報報不知受。受是能受之因、報是所受之報、此上總明。從謂受是報因下別釈、言即名言種者、唯識第八云、復次生死相續由諸習氣。然諸習氣總有三種、一名言習氣、二我執習氣、三有支習氣。名言習氣者、謂有為法各別親種。名言有二、一表義名言即能詮義音声差別、二顯境名言即能了境心心所法（略）（T36、237a-b）」。
- 『宗鏡錄』：「（略）如唯識論云、復次生死相續由諸習氣。然諸習氣總有三種、一名言習氣、二我執習氣、三有支習氣。名言習氣者、謂有為法各別親種。名言有二、一表義名言即能詮義音声差別、二顯境名言即能了境心心所法。隨二名言所熏成種、作有為法各別因緣。釈曰、言各別親種者三性種異故、能詮義声者簡無詮声。彼非名故、名是声上屈曲、唯無記性不能熏成色心等種。然因名起種立名言種（T48、450a-b）」。
- 『問答』「問、習氣有幾。答、亦有三、一名言習氣、二我執、三有支。問、習氣名。答、由業氣分熏習所成、故名習氣。問、名言習氣。答、因名起種、名名言習氣。問、名言有幾。答、有二種、一表義二顯境。問、表義名言。答、謂能詮義音声差別。問、顯境名言。答、即能了境心心所法（Z55、369c）」。
- ⑥⑱ 『成唯識論俗詮』：「無性菩薩云、或有或無有、分別不決定義。如從其炭、牛糞毛等隨其次第、生彼莖勝青蓮花根、及以蒲等（Z50、544b）」。「無性釈云、如是外內二種種子、俱為生因及為引

因。若外種子、親望於芽為能生因、転望莖等為能引因。阿頼耶識是内種子、親望名色為能生因、転望六処乃至老死為能引因、生因且尔 (Z50、547c)。「無性菩薩云、法外無用所以不増、法体不壊所以不減 (Z50、647b)」。

- ⑥⑨ 吳樹虚 (生没不詳) 撰『因明入正理論後記』:「高原師直疏云、如說勤勇無間所發性故、豈成非所作之常宗。後文華拳所作性回 (因の誤り)、唯異品無常中有。似乎不会双方举二因之意 (『国家図書館善本仏典』28冊、70)」、「高原師直疏云、法差別相違因者、是諸法中有差別義因不能成、説為相違 (『国家図書館善本仏典』28冊80)」、「高原師直疏云、因是能成立法、喻于因上不転故曰不成。 (『国家図書館善本仏典』28冊98)」、「此中現量、謂無分別。若有正智、于色等義、離名種等所有分別、現現別転故名現量。先説現量相、論主謂現量有四。此文中意不尽撰、且説聖凡所共之無分別智。云何謂之無分別、言人若有五法中之正智、于色心法等義、能離名言種子等所有分別、故名無分別。雖無名種分別、然以現行識縁現前境能了別而転、唯有智行非是虚妄分別故名現量」 (『国家図書館善本仏典』28冊114)」
- ⑦⑩ 『真貴解』:「然宗有体有依。依有能別所別。依体之上、共離九過名真立宗。極成者、極謂理至窮極、成謂性無缺減。有法者即宗前陳言、如色等自体法也 (10右)。「然極成有法者、謂対敵申量之時、此法須要極成、亦要共許。若不極成不共許、則犯所別不極成過。如三藏大師立、真故極成色是有法、定不離眼識宗、因云自許初三撰眼所不撰故因、此則無過。如不言極成、但真故色是有法、此色有許未許。如大乘家許他方仏色及仏無漏色、小乘不許 (11左)。「極成能別者、能別即宗後陳言也、謂立量者、依前指陳有法之上、所立宗言、名為能別。以此宗言、善能弁別色等法中差別体性義故。宗言既陳有法之後、名後陳宗。此宗亦要立敵同許、方為極成。如或敵者聞立者宗、或全或分不共許、此所宗即犯能別不極成過。以立者宗言不能至極成就、能別有法之中差別体性故。是故能別亦須共許、方謂極成 (11右)。「随自下和合宗体。將前陳后陳和合一処、随能立者自意樂、許所成立性、是名為宗。故集論云、宗者以所成、自所許義宣示于他令彼解了、若能如是安立、無一切過量。建立我法自性若有若無、我法差別遍不遍等具足前相、是名立宗。此中建立具足之言、即和合宗体之義。故龍樹云、是中唯随自義樂為所成立説名宗 (13左-右)。「問后陳与宗体有何別。答以軌持義足、宗体方成。今前陳有持而无軌、后陳有軌而无持、故雖後陳為宗、若未与前陳和合、立者未許、犹是宗依、未名宗体。故奘師云、前陳後陳和合宗了、立者即許、敵者不許、立敵共諍、名為宗体。是知能所未成但依非体 (13右)」。
- ⑦⑪ 『宗鏡録』:「問、何不犯能別不極成過、且小乘誰許色不離於眼識。答、今此是宗依、但他宗中有不離義。便得以小乘許眼識縁色、親取其体、有不離義、兼許眼識、当体亦不離眼識、故無能別不極成過。問、既許眼識取所縁色、有不相離義、後合成宗体、応有相扶過耶。答、無相扶失、今大乘但取境不離心、外無実境。若前陳後陳和合為宗了、立者即許、敵者不許、立敵共諍、名為宗体。此中但諍言陳、未推意許 (略)」 (T48、718b-c)。

キーワード 明代 因明学 能立 現量 龍樹